

2023年12月10日（日）待降節第一主日朝礼拝説教

『おめでとう恵まれた方』井上隆晶牧師  
ガラテヤ4章19、5章2～6節、ルカ福音書1章26～38節

### ①【処女降誕とは】

ナザレという田舎の町にマリアという娘がいました。彼女はヨセフと結婚することになっていました。ある日、マリアのところに、神様からの使いである大天使ガブリエルが来ていました。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」（ルカ1：28）この言葉をラテン語で何というかご存知でしょうか？「Ave Maria」といいます。聞いたことがあるでしょう。多くの作曲家がここから曲を書いています。この挨拶を聞いたマリアは何のことかと考え込みます。するとガブリエルは「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名づけなさい。」（31節）といいます。有名な「受胎告知」です。マリアはヨセフと婚約していましたが、まだ結婚していませんでしたので「どうしてそのようなことがありえますか。わたしは男の人を知りませんのに」というと、ガブリエルは「聖霊（神）があなたに降り、いと高き方（神）の力があなたを包む。だから生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。親類のエリサベトも、年を取っているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。神にできないことは何一つない。」（1：35～37）と説明します。その時のマリアはまだ15歳くらいだったといえます。信仰について難しいことは分からなかったと思います。ただ、不妊の女であった高齢の親類のエリサベトが身ごもったという奇跡や、「神にできないことは何一つない」という言葉を聞いて、彼女は素直に信じたのだと思います。

処女が子供を宿すということをキリスト教の用語で「処女懐胎」といいますが、神は誰の力を借りることもなく存在しておられる方ですから、神が人となる時にも、誰の力を借りないで人となることができるのだと私は単純に考えています。人間は救いを必要としており、一方神は、人と共に生き死ぬための体を必要としていました。幼いマリアがそのための身体を提供したのです。彼女の中で神と人が初めて一体になり、神人キリストが生まれました。マリアはこうして天と地を結ぶ梯子、天国の門と呼ばれるようになりました。彼女を通して神はこの世に来られたからです。

### ②【お言葉どおりこの身になりますように】

マリアが天使に語った「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身になりますように」（38節）という言葉は英語では「I am the servant of the Lord. Let it be to me according to your word.」です。[Let it be]というビートルズの有名な曲があります。この曲は、この聖書の箇所から出来たと言われています。[Let it be]とは

「なるがままに、まかせておきなさい」という意味です。私はこの「なるがままに、まかせておきなさい」という言葉を聞くと、星野富弘さんの話を思い出すのです。星野さんは高校の体育の先生をしていた時にバク転をして失敗し、その後首から下が麻痺して動かなくなるという重度の身体障害を負いました。彼がこんなことを書いています。

●「怪我をして全く動けないままに、将来のこと、過ぎた日のことを思い、悩んでいた時、ふと、激流に流されながら、元いた岸に泳ぎつこうともがいている自分の姿を見たような気がした。そして思った。『何もあそこに戻らなくてもいいんじゃないか…流されている私に、今出来るいちばんよいことをすればいいんだ』その頃から、私を支配していた闘病という意識が少しずつ薄れていったように思っている。歩けない足と動かない手と向き合って、歯を食いしばりながら一日一日を送るのではなく、むしろ動けない体から、教えられながら生活しようという気持ちになったのである。」

●曾野綾子さんも同じようなことを書いています。「『もし、神がお望みなのでしたら、仰せの通りになりますように。』この言葉を嘔みしめる人は、私の知る限りでも世の中に多いのである。そしてそのようにして人にではなく、神によって流された記憶のある人の生涯は、総じて自然で後悔もなく屈託もない。」

船には「舵」(ラダー)というものがあります。今までは自分の人生は自分で舵を取っていましたが、神様に自分の人生の舵取りお任せすることだと思うのです。それが「されるがまま」という生き方でしょう。今、私たちは「待降節」(アドヴェント)を過ごしています。このアドヴェントという言葉から「アドヴェンチャー(冒険)」とか「ベンチャー」という言葉が生まれました。今、マリアは冒険に出かけたのです。神の子、メシアを身ごもるといふ、これ以上の冒険があるでしょうか。マリアは「神様、あなたのお言葉にお任せします。どうか、この言葉のとおりのことが私に起こりますように。」とすべてをお任せしたのです。私たちも同じです。イエス様に人生の舵を任せ、神によって流されるのです。どこに流れ着くか楽しみにしましょう。キリストと共に冒険するなら楽しい冒険です。

### ③【わたしの魂は主を崇める】

マリアは親戚のエリサベトを訪問し、賛歌を歌いました。「わたしの魂は主を崇め、私の霊は救い主である神を喜びたたえます。力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。」(47~48節) この「崇める」をラテン語で「マグニフィカート」といい、「大きくする」という意味です。それゆえこの賛歌は「私の魂は主を大きくしています」という意味になります。私の中で自分というものが小さくなってゆき、神様が大きくなっていくということです。自分がしたことがちっぽけに見えてきて、

神様がして下さったことが大きく見えてくる、これが神を崇めること、神を讃えることなのです。マリアは「身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです。」(48節)と歌いました。こんなつまらない私が用いられたと言っても謙遜なのです。自分を小さな貧しい者だと思っています。だから恵みが見えるのです。この後、救い主の母となったマリアがものすごく待遇が良くなったとか、良い家に住み、教会の権力や富を手に入れたとかは聖書は何も書いていません。マリアのすごさは最初の謙虚さを失わなかったということだと思っています。

●榎本保郎牧師はこんなことを書いています。「私たちは互いに気が合うから、また何か利害を共にするから教会に来ているわけではない。いろいろの人たちが来ている教会に一つの統一、一つの結びがあるとすれば、それはキリスト・イエスである。私が今このような所でこのようなことをしているのも、イエス・キリストによるのであり、あなたがたが朝早くから来て私の話を聞いてくださるのも、イエス・キリストによるのである。だから、私たちが教会生活をしてゆく上でいつも目をつけておるところはイエス・キリストである。…教会というものはイエス・キリストに根ざし、そこに基を置いているのだから、そのほかのことに目を向けてゆくことは、それがどんなに正当性を持っていても間違いだと思う。…パウロがコリント教会を見た時には、彼にはその人間がどうであるかというよりも、神によってどうされているかというふうに映っていたのである。」

真にその通りだと思っています。もし、私たちからキリストがいなくなったら、ここに居ないし、ここに居る人たちとも他人同士になるのです。キリストが居なければ人はバラバラになるのです。キリストが帯び(ベルト)です。その人の内にキリストがどんどん大きくなれば、人とも結ばれますが、キリストが小さくなり、消えてしまえば、教会にも来ないし、人とも出会わないのです。自分の中にキリストをしっかりと根づかせ、キリストを大木のように大きく成長させたいと思います。マリアの様に自分というものが小さくなってゆき、神様がますます大きく見えてくる、そのような信仰を養いましょう。